

---

# 超絶アルバイター リュウジ

尺取虫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超絶アルバイター リュウジ

### 【NZコード】

N1700Z

### 【作者名】

尺取虫

### 【あらすじ】

多くの失敗を繰り返し、仕事を通して多くのことを学んでいくダメ大学生の成長物語。

## フィルちゃんリュウジ（前書き）

登場人物、団体は、実在しません。当たり前です。キリッ！

## ファイルちゃんとリュウジ

一人のイケテナイ学生が、大学の構内を雑誌を読みながら歩いていた。

隠すほどのことも無い。コイツは、大学2年生の鴨野龍司である。一応理系。粘菌の「フィザルム」なるものを飼育している生物学を専攻する学生だ。

雑誌の名前は、「これぞ、超絶アルバイト！」単なる、仕事探し専門のフリーペーパーである。

なぜ、アルバイトを探しているのか？

それは昨日のことだった。

鴨野龍司は、いつものように粘菌「フィザルム」のファイルちゃんに餌をあげようと押入れを開けた。そこには、オートミールの袋が大切に保管してある。

鼻歌を歌いながらいつものように袋を開ける。

「ギャーーー！ ね、ネズミだ！ わーーー！」

そして、腰が抜けた。

そこには、大きなネズミが入っていた。それにしても驚きすぎである。仮にも、生物学専攻。ネズミと言つた。マウスと呼べ。

「フィルちゃんの餌が…。どうしよう。仕送りだけでは良質のオートミールが買えないし。」

「そうだ！支出が増えたら、収入を増やせばいいんだ！」

まあ、要するにだ。彼は、粘菌の餌のためにバイトをしちゃうといつ  
のである。

わあー。いやうど、解説しちゃう。

この世界では、バイトは全て、国の機関、「日本国バイト協会」によって管理されている。これは、日雇い派遣労働者の増加と、その反動による派遣業への規制が、ああなつて、こうなつて、うにゅうやになつてああ～～～♪は～♪は～♪じよ といつわけで、成立した団体なのだ。要するに、でっかい派遣業者だ。

そのバイト協会に登録しておくと、ランクに応じて仕事が貰える。仕事の評価が高いと、ランクが上がる。因みに最低ランクはEラン

ク  
だ。

あれ、リュウジが走りだしたぞ。どうに向かおうと二つのだ！



## リュウジはプロジェクト

リュウジは駆けた。おお、意外に速いじゃないか。そんなに急いでどこに行く。

ペロロロロ…

ん。この音は携帯か？鞄の中か？

リュウジは立ち止まり携帯を開いた。

「はい。もしもし。鶴野ですが。」

「どうしたのですか？指定したお時間が過ぎてこますよ。」

年配の女性の声がする。

「すみません。た、太陽の光が眩しくて。必ず向かいますので。」

おい。どんないい訳だ。なんでも太陽のせいにすればいいってもんじゃないぞ。

「よくわからないけど、とにかく急いで来てくださいね。」

ガチャ

走れ、リュウジ。なんだかよくわからんが、走れ。遅刻だ！走れ！

リュウジは、汗でびしょぬれになりながら、たりたりと歩きながら、雑居ビルのエレベーターに乗った。

「はあ、はあ。もう、ハシレナイ。」

この軟弱者め。草食系どこのかバラナコア系とよばれりやつれ

エレベーターが停止した。

そして、扉が開いた。

そこには、「大日本バイト協会」の事務室があった。

「まず、遅刻はダメです。それに、謝罪の言葉も無い。これでは、失格です。」

年配のお同様風のいかにもキャリア積んでます！って感じの人なんだか怒っている。

「い、『めんなさい』。もう、走れないくらい疲れてしまつてですねえ。」

お、リュウジは意外と平氣なようだ。

苦笑いの気持ちの悪い笑みを浮かべながら「うへうへ」としている。ここは謝り続けるべきではないだろうか。

「ハラ！ アンタは何を考えているのー。その態度から改めなさい

！」

怒られた。まあ、あたりまえか。最近の若いもんはダメだな～ハハツ。

「う、ごめんなさい。」

「まず、私は、荻原と申します。あなたのジョブアドバイザーです。普段は、この事務所で仕事の割り振りや受付をしております。」

「ど、どいつも。オレは、鴨野龍司です。」

「まず、当協会のシステムを紹介します。入会しますと、ジョブデータベースに登録され、各人にあつた仕事が

紹介されます。もちろん、ご希望に添えない場合は断つても結構です。

時給はランクによつて変動します。ランクはFクラスから始まりSクラス

まであります。入会時は、Fクラスからのスタートです。

ランクの決定は、アルバイト先の評価、経験、資格等によつて変動します。

とはいっても、アルバイト先の評価×現場の回数でほとんど決まります。

それから、会社から会員へ支払われる報奨金の4割は、当協会が徴収します。

それで、リュウジさんはアルバイトがしたいといつてましたけど、どんなアルバイトがご希望ですか？？

「ぶっちゃけよくわかんないんで。楽な奴があればいいです。

あ～あと、労働中の事故とか補償されんですか？

物とか壊して弁償しろーなんて言われても、オレ、払えないですよ。」

「おい。リュウジ。その受け答えはどうかと思うぞ。また、怒られるんじゃ…

「つづくや。まあ、仕事はひりひりで毎日振るところとでここですね。

当協会で徴収するお金には、保険料が含まれています。」「安心してくださいね。」

あれ、怒らないのか…。

「では、バイト協会によつ、バイトマン腕時計が支給されますので、それを差し上げますね。」

「へー。これがバイトマン腕時計ですか。なんかちやつちいですね。」

「うむ。確かに普通の百円で売つてるよつたな黒いペーパーホールの腕時計だ。

「まあ、着けてみてください。」

「では。」

リュウジはバイトマン腕時計を左手首に装着した。

時計の「デジタル画面の背景に」「G」の赤い文字が浮かびあがった。

「なんですか？これは。すぐこですね。」

「その文字が、君の今のランクです。」

「え。んあ。もう一度言つてくれませんか？」

「その文字が、君の今のランクです。

あなたは、Gランク。」

「あ、あれ。Fランクが最低じゃないの？」

「あなたは遅刻もしたし、態度が最低です。

とても現場に送り出せません。Gランクはそういう人のためのランクです。」

ほほ～そんなランクがあるのか。良かつたなリュウジ。レアだぞ。それは。

「因みにGランクの下は登録抹消です。これ以上ランクを落さないよつこ

頑張つてくださいね。」

頑張れリュウジー負けるなリュウジー仕事はもりえるのかー・リュウジー！



## リュウジはGIGANK（後書き）

次は初バイトに向かいます。どんな仕事が待っているのか。ドキドキ。ワクワク。

## 初仕事だ！リュウジ！

時は、5月の連休前。

リュウジは、一人、携帯をジッと見つめていた。  
そんなに見つめても何も起きないだ。リュウジ。

バイト協会に登録したものの、待てど暮らせど仕事の連絡はなかつた。

そして、2週間が経ってしまった。

「ヤバイ。これでは可愛い粘菌達を養えなくなつてしまつ。…もつ自分の食費を削るしかないのか。」

リュウジはゲームもしないし、漫画も買わない。ネットも家ではしない。現代では非常に珍しい青年である。その生活は非常に「清貧」に分類されことだらう。粘菌へ餌代を除いて。

「あああ、早くバイトしないと～」

そつ叫んで頭を搔き鳩リ、机に突つ伏した。

その時、携帯電話の音が鳴り響いた！！

ピロロロロ…

「…あわ、もし、もし、鴨野隆司です。」

「『もしもし』じゃないわよ。もっとハキハキ『はい！鴨野です』って言いなさい。…まあ、いいわ。今日は仕事をあなたに割り振ろうと思つて電話しました。」

「え、仕事ですか？やつたあ！こつです？どんな仕事ですか？」

「ちょっと落ち着いて。あなたにもできそうな簡単なお仕事よ。日給で6500円。モデルルームの看板持つです。『ホールデンウェイクの初日ね。空いてます？』

「もう少しあてますよ～場所はどこですか？いやあ～うつれしいな～」

「じゃあ、お仕事入れるわよ。詳細はメールでお知らせするので、時刻と場所はそれで確認してください。それじゃあ、頑張ってね。期待してないけど。」

「はい。頑張ります。それじゃ。」

「ピッ。リュウジは、携帯電話の通話を切つた。

「ヤッホーい。仕事だ！」

5月の穏やかな風に吹かれながらリュウジは自転車を走らせた。

乗客の少ないバスに乗り、隣町の穏やかな住宅街に向かつ。

もちろん、遅刻しないよう、トラブルがあつてもいいように、仕事開始時刻の30分前に現場に着くバスに乗つてゐる。前回、事務所に行くのに遅刻しちゃつたからね。

よし、今日のオレ。気合入つているぞ！

「おはよ～す～。… あ～れ。誰もいしない。」

オドオド

「おはよ～。君が今日のバイト君か。いろいろ準備があるからよつと待つてくれないか。」

モデルルームの社員さんが話しかけてきた。どうやら、この人がお客様さん（依頼人）らしい。まあ、優しそうな30歳くらいの青年だ。休日なのに頑張つてるな～

「はーー。」

「じゃあ、あのイスに座つて、この看板を持つて、ずっと座つていってくれないか。」

「看板持つてるだけですか？それだけ？旗とか振るとか…」

「いや。余計なことをしなくていいよ。看板は法律上、だれかが持つてないといけないんだ。漫画でも読みながら看板支えていればいいよ。楽だよ。トイレはそこにあるから。じゃあ、宜しく

リュウジはキョトンとしていた。「こんな楽な仕事。…これで、いいんだろうか。

## 森をぼーと見つめるココウジ

田の前は森だ。リュウジは、大きな道路の前で、看板持ちをしている。

大きな道路だが、車はあんまり通らない。

人通りも多くない。こんなところで看板持つて何の意味があるのか。

「でも、お金は確実に入っている。一時間で、チャリーン。一時間で、チャリーン」

リュウジは、漫画を持つてきていなかつた。音楽を聞くことはできただが、仕事中にMP3プレイヤーを取り出して耳に嵌めるのは、何だか気が引けた。だから、眞面目にじつと田の前の新緑に満ちた森を見つめていた。

なんでこんなことをしてるんだろう。お金は確かに入る。でもなんだか、空しい。オレは看板持つてるだけだ。ほんとにそれだけだ。そんなことを考えていたら、時間が過ぎてしまった。

「おい。バイト君。そろそろお昼だ。昼」はんはこつちで食べなさい。

看板はそのへんに寝かせておいて。

モデルルームの裏。仮設のテントの中で、ひんやりとしたパイプイ

スに座り、コンビニで買った冷たいおにぎりを無心で食べる。

「よつこじゅ。つと」

水道の工事をしていたおっさんが横に座った。

「大学生か。」

急におっさんが話しかけてきた。

「ふあー。…」「クン 大学生です。」

おっさんは、少し下も向いて呟く。

「おめえ、Gランクか…。」

リュウジは狼狽した。

「な、な、あんでそれを！」

「その時計にちやんと表示されてるぞ。」

おっさんが指した先には、バイトマン腕時計があった。

「そ、っか~Gランクなんですよ。恥ずかしい限りです。ハハハ。」

「最低のGランクだから心配になつて、お前さんの働きぶりを仕事の合間にちらりと見せてもらつたが、真面目じやないか。よつ。漫画も読まず、音楽も聴かず。眠りもしないで。」

「…。いや。ただ、くそ真面目なだけですよ。」

「おめえのこるべやランクは、Gランクなんかじゃねえ。大事なのは真面目ただけだ。真面目に仕事しているおめえが、こんなとこにこいつやこねえよ。」

「え、やうですか。」

「おつと。俺もこなんとこで油売つてたら、仕事が遅れちまう。さあ、じーじとこーじー。」

そう、言ひとおつやんは弁当を口に流し込み、足早に工事現場に戻つていた。

「何が、いいたかつたんだよー。」

リコウジは、そつ笑いた。

午後からは最悪だった。午前中の好天気が嘘のよつて天候が悪化し、激しい雨が降つてきたのだ。

モデルルームの兄ちゃんに合羽を貸してもらい、縮こまつながら看板をもつた。いふなると、堪えるのが仕事のよつだ。

「… や、寒こよひ。 せむひ。」

5円といえども雨は冷たい。その寒さで体が震えた。

「作業終わりました~」

そういながら、リュウジはモータルームの兄ちゃんのところに合羽を持つていった。

「作業?… ああ、看板持けね。」

若干、侮蔑の表情が見えた気がしたが。まあ、作業とは呼べんわな。

「合羽はそこに置いてといて。じゃあ。もひ、帰つていーから。おつかれさん。謝だし、評価はひとつと高めに申告しちゃよ。お疲れ様!」

「評価?」

「あれ、聞いてないの?現場の担当者は、バイト君の評価をバイト協会に送つてこらるんだよ。」

「あ、やつこえば荻原さんがそんなこと言つてこたよつたな。」

「はい。じゃあ、お疲れ~」

「お疲れ様で~す。」

濡れた体を震わせながら、帰り道、リュウジは考えた。

評価。ランク。お金。自分。仕事。評価。ランク。お金。仕事。自分。評価。ランク。お金。仕事。自分。評価。ランク。お金。仕事。自分。

引越し屋に初アライだー！リュウジー！

リュウジは、初バイト（住宅展示場の看板持ち）と「ハリシション」をクリアした。初バイトを通して自分を見つめなおしてもこのようだ。少しだけ、リュウジが強くなつたように見える。さて、今回はどんな仕事をするのか。いや、仕事をも「らざるのか？リュウジー！？」

5月の連休の2日目。お重いを食べ終わつたリュウジは、1月から出しつぱなしの「タツ（布団付き）」に入つてぬぐぬぐしながら分子生物学の勉強をしていた。まさに、学生としての最大の喜びを満喫していたのだ！

そこへ、一本の電話がかかってきた。

ペペペッ！

「はー。じゅりは鴨野龍司です。お掛けになつた…」

「もうー…ふざけないで！ ランクを下さりやうわよー。」

この声は、バイト協会のおばちゃん。荻原さんだ。

「それは嫌ですね～。それで、今日はなんですか？」

「はー。忙しいから手短に言つね。明日で急なんだけれど、他の現

場で欠員がでたの。引越しの現場なんだけど。なかなか引き受けてくれる人がいなくて。ほんとは、Eランク以上のお仕事なんだけれど、鴨野さんに頼みたいの。どう。明日、予定はある？」

「引越しですか？オレ、体力ないつスよ。部活も粘菌部だし。」

「そう。でもね～。一度やってみたらいいと思つわ。そうだ。引き受けてくれたら、ランクアップしてあげる。前回、好評価だつたし。Fランクに戻してあげる。今回の現場で、好評価ならEランクにしてもいいわ。やってみない？」

その時、リュウジの頭の中には、前回のバイトでであった水道工事のおっさんの顔が浮かんだ。そういえば、真面目だとか褒めてたなあ。Gランクについてはダメだとも言つてたなあ～。

「そうですね。一回やってみます。」

「じゃあ、Fランクにするね。ランクアップおめでとう。詳細はメールで送るから、よく見といてね。朝早いから、遅刻は絶対にしないよつこ。じゃあね～。」

上機嫌になつた荻原さんはそう言つて電話をきつた。

明日は、初の引越しの現場か大変な日になりそうだー！

次回。リュウジは引越し現場に向かう。

プラナリア系男子リュウジはガテン系の仕事ができるのかー!?リュウジ絶対絶命!

## 現場に向かうゼーリュウジ！

まだ暗い、朝4時にリュウジは目を覚ました。まだ、夜中の音がする。静まりかえつていて、全てが朝を待っているかのようだ。そもそも。眠いが、頑張つて布団から這い出る。

30分かけて着替えと歯磨きをして、身を整える。いつもはこんなキザなことしないよ。いや、これは荻原さんの指示なわけです。オレは自然主義者だから、ボサボサが至上だと思ってる。こんなキザなまねは信条に反するのだ。

だが、前回、初バイトして思つたんだが、人に与える印象つて結構大事かもしね。今日は、ちょっとデキル男みたいな風に、近づけたい気分。いや、ちょっとダケダヨ！

忘れ物が無いか、指差し確認。サイフよし！、タオルよし！携帯よし！

これも、荻原さんの指示です。はい…。遠足に行く前の子供みたい。まあ、忘れ物しちゃあだめだしね。おつと、粘菌大百科だけはもつていかなきや。

リュウジは、集合場所に30分前に着くよつと、玄関を出た。

まだ、5時前だ。人はだれもいない。ライトをつけた自転車を漕い

で近くの駅までレッジパー！

郊外の田舎の駅まで一時間程電車で移動。つていうか、現場に近い人をまわせばいいのに。

田んぼの中の駅で、下車。朝の田園つて気持ちいい～。  
で。ここであつてんのかな。 オドオド。

「おせよハヤカワです。今から呼をとります！」

今日のメンバーはびつぱり5人らしい。集合時間5分位前に全員集  
まつた。どうやらオレは早く来すぎたらしく。なんだか、みんな慣  
れていて頼もしいな～

「鴨野龍司さん。ああ、いるね。初めてだよね。それから、荻原さ  
んから制服のプレゼントだつて。はい、コレ。渡すよつに頼まれて  
いたんだよ。 よしーじゃあ、行きますか！」

制服のプレゼントか～。もしかして。シンテレ?  
あ、そういうえば、どこに行くのかちゃんと教えてもらつてないな～

「す、すいません。現場つてどこですか。遠いんですか？」

点呼をとつていた、リーダーの風格漂うロングのお兄さんは答える。

「ああ、そうだ、初めてだよね。引越し屋さんの事業所に行くんだよ。そこで、トラックに乗り込む。みんなバラバラの現場になると思つよ。ん、会社の人2人、バイト1人で作業することが多いかな」

「

「ちょっとイメージ沸かないっすね。」

「まあ、行けばわかるよ。帰りはバラバラだから、作業が終わつたら荻原さんに電話してね。」

事業所に着いたら、制服ボロシャツを着て、その上に引越し屋さんの制服を「オン!」する。ちょ、ちょっと暑いかもです。

そうして、駐車場にオレ達バイトは、一列に並んだ。

トラックの運転手（引越し屋の社員）さん達が次々に来る。そして、「君、こっち」と、手招きする。

1人消え。2人消え。3人消え。4人消え。

どんどん現場に皆連れられていく。

なんだか、顔つきを見ているような気がするが…

こうしてリュウジは、駐車場にポツンと一人残された。。。ガーン

## 現場に向かうゼーリュウジー（後書き）

現場に行くまでのお話で、一話書いてしまった。これだけでは、内容が無い。次回こそ、感動を届けたい。ような気がする。

## 1階と4階の間

「じまでのあらすじ。

リュウジは粘菌の餌代を稼ぐため、日本バイト協会に登録しアルバイトをはじめた。最初は、首寸前のGランク。初のバイトで住宅展示場の看板持ちをやり遂げた。次に指示された現場は、引越し屋の補助だつた。現場に着いたまでは良かったが、ポツンと駐車場に置き去りにされるのだった。

朝の駐車場に取り残されたリュウジは、一人立つていた。どうしよう。オドオド。事務所に戻つて声掛けでみるか…

「あ、きみつー。じつち、じつち

でました！手招きする救世主！ついのまは言こすがか。社員の人が何だか手招きしているよ。

「じのトックにあ、乗つて。時間無いからー。」

大きなトラックの狭い座席に座る。へへこんな風になつてんだ。結構せまつくるしいんだなあ。つていうか物を置きやすげじゃないか？

今日一緒に仕事をするのは、この2人で～す。

まず、こっちの運転席にいる50代くらいの細身の小さなおっさん。優しそうかも。つていうかこの体で、引越し屋なのか。よく、勤まるな～

そして、地図を見ている30歳くらいの眼鏡かけた人が、さつき手招きしていた社員さん。う～ん。引越し屋の「ガテン系」のイメージと違うかも。こっちの人は筋肉はついているが…

はい。実は、今、ぶつちやけ「暇」です。現場に着くのに、あと30分はかかるところ。

朝早いのも合点がいくね。

さあ、つくかな つくかな

… 1Jの頃はまだリュウジはわかつていなかつた。何もかも。

現場に着くとまず、お姉さんと社員さんが話す。いろいろと説明する。部屋の傷とかの確認する。ちゃんとしてるんだな。

そして、荷造りをする。トラックの中には、布団やらハンガー掛けやら、ダンボールやら、梱包道具が揃っている。それを使って荷造りをするのだ。

「おい！バイト君！ 衣類をこの箱に詰め込んで！ 終わったら声掛け！」

「はい。」

「ばかやうひー！返事は延ばすなー！ハイツー！って言えー。」

「ハイツー！すいません。」

いきなり怒りられてしまった。前途多難だ。

階段の踊り場で、リュウジは佇んでいた。別にサボっているわけじゃないよ！

階段を猛スピードでメガネの方の社員さんが、ダンボールを持って

駆け下りてくるー

「ハイツー！」

大きな声を出し、ダンボール箱が手渡されるー

「ハイツー！」

受け取つたら返事をして、トラックまで猛ダッシュする。

そして、渡したら、階段を駆け上がり、元の場所に戻るー

ダツ。ドタドタドタ。ダツ。

「はあ、はあ、はあ、はあ。」

はつきり言つて息つく暇もない。走る。走る。走る。  
こんなに走つたことはないといつ位、走る。

2段重ねなんてバイト2回目のオレにはむりだよーー

やつこじているうちに、荷物の波は去つた。

それにも、ダンボール多いなあ。

社員の人2人が、冷蔵庫と洗濯機を運び出し、完了！  
(その間、リュウジは梱包資材の片付けを命じられた)

「やつた～終わりだ……わあ、帰るぞーー！」

「何を言つてゐんだ。まだ、一件田の荷物を積んだだけだぞ。」

「えつ……」

苦笑つてゐてゐるよ～。じつと見つ

## 1階と4階の間（後書き）

次こそ、意味のあるものにしたいと想つのだが、  
余分な描寫に費やす部分があくまで、じつにこも本題に入れな  
い。

うつ。この分だと、じつなるといひ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1700z/>

---

超絶アルバイター リュウジ

2011年12月21日22時53分発行